

白金葭

7月号



平成29年7月発行

第77号

白金葭定例句会案内

月例句会報 (17 / 7 / 21) 9名欠4 青林檎、森林浴)

九月十五日 (金) 駒場吟行句会・駒場住区セ一時～五時

九月二十二日 (第四金) 正午～三時第三兼題・美術の秋、秋鯖

十月二十日 (金) 正午～三時第三兼題・鶴、朝顔の実

兼題句参考句 (九月二十一日分 美術の秋、秋鯖)

秋鯖を心祝ひのありて買ふ

宮下翠舟

草間時彦

熊坂淑

龍神悠紀子

上村占魚

高澤良一

依光陽子

小野口正江

仲村美智子

衣川砂生

河野紀代乃

山口青邨

吉田汀史

鈴木貞砂女

佐藤鬼房

坂巻純子

秋鯖や味噌煮の味噌の多寡を問う

夫と来てはなればなれに美術展

絵筆すてしわれに美術の秋来れど

美術の秋上野にぽんと降り立ちて

院展や蓮の模様の帶しめて

日展の流れ三日の銀座かな

二科展の女の臍と向ひ合ふ

あくびせる日展ガール膝毛布

日展をふたたび訪ひて恋ふ絵あり

コーヒー喫む美術の秋の森の中

秋鯖に味噌は三河の八丁ぞ

秋鯖の仕入ごころをそそのかす

秋鯖の大の一尾を値切りゐる

秋鯖の一本棒のどこ掴む

おほいくさ

大戦経たる山脈青林檎

神宮は東京の臍森林浴

雨傘をたたみ。パラソル朝顔市

山晴れて城見える町青林檎

木漏れ日の肌の的躰森林浴

藩守りし檜木立や森林浴

森林浴 檜翌檜櫛の氣

青林檎手を経て箱に詰めらるゝ

いつまでもセンチメンタル青りんご

燕の子巣立つてわが家飛び廻る

森林浴みんなでうたふ木遣歌

木のチップ敷かれ森林浴の道

飯田孝三

9名欠4 青林檎、森林浴)

光 みち

学生服脱ぎみちのくへ青林檎
空梅雨の厨に浸すひじきかな
熊除けの鈴のなるなり木下闇

松村幸一

忘れじの一人夜汽車の青林檎
ブロンズの女神と一緒に森林浴
受けて見よ抛るよ恋の青林檎
神楽坂夜店尽きれば相別れ
ぼうたんとして開けども水中花

吉羽多美子

蝙蝠や暮るゝに早き漁師町

紫を好む佛に紫陽花を

百合匂ふ佛間に喪服ぬいでをり
森林浴身の内青き風ぬける
青林檎我が青春に悔ひのあり

倉田紀子

夕涼や消壺並ぶ煎餅屋
白粥に一休寺納豆夏の風邪
アルバムに一通の文青林檎
水馬の空見る眼空色に

浅野正美

闇の中飛び交ふ螢ひかり帶
丸かじり青林檎汁ほとばしる
森林浴風体内を吹き抜ける
木漏れ日の中歩みつつ森林浴
目覚めるや今朝も又熊蟬の声

武者昭七

遠つ世の海の色かも青りんご
探しても森林浴などない季寄せ
遠雷や遠ざかり行くもののけはひすれ
アカシヤの花房垂れて夜の雨
大空に神立つと見て白雨来る

パンワイン青林檎買う旅の市

磯貝健一

炎帝の都ぞ遠し森林浴

仲本興正

梅雨明けや廁の窓の空の青

上野駅より子らは育ちぬ青りんご

夏山路總身包む木の香かな

森林浴女が小径よりふいと

青林檎プールサイドで友と食む

まだ黒き雛も混じりて葦の陰

青林檎恋てふものの愁ひ知る

折り返す舟に葭切かまびすし

佐藤宏之助

森林浴方位未確の樹海にて

田宮敦子

青林檎ここは信濃の古戦場

ソーダ水九〇才はまだ若い

尺程の片陰に入り煙草吸ふ

夏蝶や社の裏の竹箆

廃線の森林鉄道遠郭公

蝦蛄を取つて来る子と触れぬ子

遁走の途中の蛇の尾を掴む

五平餅森林浴の木曽路かな

森林浴点滴余韻の睡魔とも

初恋の味には遠し青りんご

青木啓泰

一句鑑賞

光成高志

正美

木漏れ日の中歩みつつ森林浴

梅拾うどいいつもこいつも太りぎみ
梅雨に濡れ句会に着いてすぐ出句
緑陰に常陸府中の鐘ドロボー

句会ではもう一つの木漏れ日の句を難しい言葉に魅
かれてとつたのであるが、掲句は森林浴を普通の言葉
で書いてあるので、一晩寝て起きて再読してみると返
つて心に響いてきた。実は五月末森林浴発祥の地とし

て知られる信州木曽上松の赤沢自然休養林を歩いた。赤沢森林浴は今回で53回であるとか。季寄せにないと

いう句もあつたように比較的新しい季語である。樹齢

三百年を超える檜の天然林の中での森林浴は清流のせらぎがあり、橋あり、野鳥のさえずりあり、木洩れ日ありの「木のチップ敷かれ森林浴の道」(みち)の爽やかな散策でした。檜ヒノキ・翌檜アスナロ・櫛サワラ・鼠子ネズコ・高野楨コウヤマキは芭蕉が江戸に出た頃禁伐木となり木曽五木と呼ばれるようなる。天正慶長の頃秀吉、家康が夫々直轄領として森林伐採を思うままに行つたが、これではいけないと寛文の頃から尾張藩が森林の保護政策をとり、以来三百余年守られてきたので、今に見られる天然林となつた。五木の直立した幹、その枝ぶりを仰ぎ、歩みつつ思つたことは自然に対する畏れでした。「造化にしたがひ、造化にかへれとなり」とはこの気持であるうと思つました。

森林浴みんなでうたふ木遣歌

みち

散策ガイドがついて森林浴の遊歩道を歩く。ガイドは先の木下遊船のガイドと同じくよく喋る。その自慢が御神木伐採跡地への案内である。御社始祭みそまほじめさ

いがここで行われたという切株の前で歌詞を手に捧げみんなに木遣り歌を歌わせる。作者が書き取つたその一部は「木曽の深山で育てたるヨーイヨーイ日ノ木一

のこの檜ヨーイヨーイ伊勢の社に納めますエンヤラヨーメトセ ヨイシヨヨイシヨ」というものである。

梅雨明けや廁の窓の空の青

健二

寺山修司に同じような句があると指摘されたので、調べると「便所より青空見えて啄木忌」であつて、掲句とは余情が全然違う。我々凡人はこういう作り方でいいと思う。梅雨明けの季節感を便所の古語廁の窓に見た瞬間に言いとめられた。寺山修司の句は、「螢雪時代」昭和二十八年十一月号・俳句二席入選・中村草田男選」に載つたもので彼はまだ高校に入学したばかりであつた。まことに早熟でその才に感嘆する。

尺程の片陰に入り煙草吸ふ

宏之助

句会の日は梅雨明け三日目、炎昼の日、一尺程の片陰に入つて煙草を吸う。屋内は禁煙だからだ。ヘビースモーカーの心理は斯くの如くで、非喫煙者はこれを理解できないでしよう。下戸は上戸の心理がわからないと類似している。その姿にかすかなフモールが漂う。それが俳美だと思う。フモールとは、個々の人間の愚かさも、愛すべき滑稽として受け入れるという意味だ。

一句鑑賞

磯目健一

受けて見よ抛るよ恋の青林檎

幸一

元気の良い恋の駆け引きを描く青春のワンカット。

恋の真剣度が高いほど自意識や羞恥心に邪魔され勇気が要る。演戯あるいは独り相撲に終わらうと、決行すれば我が青春に悔いなし。シンボリックな青春の恋

の小道具として青林檎に着目した機知、啖呵のごとき気づぶのいい音調が戯画的な俳味を醸している。蕉風の侘びさびの出発をなす「虚栗」に恋を吟じる艶麗な連句が並び芭蕉も賞揚していることは有名。

森林浴檜翌檜櫛の氣

この三種の樹木はいずれも木の香が強いヒノキ科の常緑樹である。これらの木の樹間に身を置くとき特有の精油成分ヒノキチオールが匂い立つて快い山気に囲繞される。新春の季語「淑氣」のように天地の気配として「氣」と作者はそれをいうのである。それに全身を浸すことが理想的な森林浴となる。もともとヒノキ科の木は腐り難く、抗菌性が高く健康にいいことが知られている。

廃線の森林鉄道遠郭公

山深く廃線跡が一筋真っ直ぐ遙か彼方まで続き山の端に没している。その無人の広い空間の果てから郭公の澄んだ鳴き声が聞こえてくる。過去の人間のすべての當為は廃墟となり在るのは山河のみ。芭蕉の「うきわれをさびしがらせよかんこどり」の句が思い浮かぶが、現代人の作者はその寂寥感とは無縁で、広く豊か

な自然そのものに歓びを抱く。

木漏れ日の肌の的躰森林浴

なんといっても句の肝は死語に近い「的躰」なる言葉である。いわばスポットライトというべき光線の到達点だ。木漏れ日が光の矢となつて今しも歩み来た女性の白い肌に差し込み瞬間に点となつて照り映えたのである。夏の寛衣から覗く女性の素肌と木漏れ日の取り合わせは印象派の絵画のような上品なイロチズムを感じさせる。

大戦経たる山脈青林檎

大戦_{おおいくさ}後の故郷の山脈に佇立し遠望する青年。その山をかりに津軽の岩木山とすれば情景は敗戦時の石坂洋次郎描く「青い山脈」の世界だ。国破れて山河ありは当時の日本人の等しく抱いた感慨だった。空前のベストセラーとなつた理由もそこにある。それから茫茫七十余年。そのかみの青年の日を作者は想起しているのだ。

宏之助

一句鑑賞

忘れじの一人夜汽車の青林檎

武者昭七

かつての夜汽車にはふるさとを捨てて異郷に向かう者の悲しみのにおいがあつた「男子郷閨を出で・・・」などと勇ましい言葉を口にしてみてもそれはぬぐえな

孝三

かつた。まして今はひとり旅。ささえるものは一個の青林檎だ。それは青春の恋情の形象である。「忘れ得ぬ」ではなく、「忘れじ」という強い言葉に注意しよう。いまも悲しみは老いの胸（失礼！）に秘められたまま生きているのである。

青林檎恋てふものの愁い知る 青林檎我が青春に悔ひのあり

アルバムに一通の文青林檎

多美子 紀子 健二

「青林檎」という兼題に接したとき僕の頭に浮かんだものは島崎藤村の「初恋」だった。「やさしく白き手をのべて林檎をわれに与えしは・・人恋そめし始めなり」という詩句の清新さは今でもなお新鮮である。掲出句三句はいずれもそんな初々しい痛みと恋ごころを秘めて優しい。思わずしばしわが青春を振り返って回想に足を止めてしまう。それにも現代の若者たちは藤村のこの名詩を知るや知らずや。知らぬとすれば国語教育は重大な過ちをおかしている。あこがれ出るここそこそが青春のあかしかだからである。

梅雨明けや廁の窓の空の青

健二

廁という言い方もめったに聞くことのないことばになってしまった。トイレといまはいう。外に向かつて短冊形の無双窓と呼ばれる窓がひらいていた。そこから外がのぞけた。あるときそこから覗いていた空の青

さに作者はあつとおどろいたのだ。そうだ梅雨明けだつた。改めて知る夏の空の青さとかがやき。空というものの大ささを知つた一瞬だつた。

森林浴女が小径よりふいと

興正

森林浴の最中に脇の小径から女が「ふいと」飛び出してきたというのだ。ああびっくりした。どんな女かなにをしてたのか。ミステリージみたところが面白い。

炎帝の都ぞ遠し森林浴

健二

「炎帝」は暑氣の神様であり火の帝王。暑さに茹る大都会を遠く見下ろして作者は悠々と森林浴。なんと贅沢な。酷暑の都を遠く離れて得意げな帝王気分だ。堂々とした漢語調がそれをもりあげている。現代の帝王のうたである。

夏蝶や社の裏の竹箒

敦子

鬱蒼とした社の森はかつて神々の降臨したまゝ聖なる空間であった。神々はひとつ乞いに応じて高々とそびえる大樹を伝つて地上に降り立つた。聖なる空間を守る者は神官とよばれた。今その役をひきつぐものは巫女と呼ばれる若い女性たちだ。社の裏にひつそりと立てかけられた竹箒は彼女たちの仕事の名残である。しんと静まり返つた聖なる空間。夏蝶の影がそこをよぎつていく。忘れられ見落とされがちな、しかし

守りつがれなければならない涼やかな風景を作者は静かにみつめている。

一句鑑賞

飯田孝三

森林浴みんなでうたふ木遣歌

みち

木遣歌は元々重い木材運びのいわば労働歌、大勢で掛けながら唄う。そこから、皆でうち揃つての祭礼や祝賀の歌に。森林浴は海水浴、日光浴になぞらえた市民のエクスカーション、大抵はグループです。気の合つた仲間同士歌いつつ緑の下を行き、森の生気を満喫する。心身甦る行楽の現場から、ふと遙かに労働の當為の昔を思うのである。さりげない「みんなでうたふ」が彼我の時空を繋いで手柄。この句のいのちである。

夏蝶や社の裏の竹箒

敦子

一読、夏蝶の舞姿が目に入る懐しの風景である。夏蝶は現代的な風物との取合せも新鮮だが、この句にも又紛れなき夏蝶を見るのだ。舞台の新旧を問わぬ本物の夏蝶の姿がそこにある、だから切字「や」が利き、「社の裏」も「竹箒」も自己主張しない。この次は新舞台で夏蝶を見てみたい。

森林浴檜翠檜櫻の氣

高志

とつさに木曽の五木を思つたとは、互選評宏之助さんの弁。宜々、真性森林浴の賦である。どこの神域よ

遠つ世の海の色かも青りんご

昭七

地球が青いと言つたのは、旧ソヴィエト初の宇宙飛行士、地球は水の惑星、万物のいのちは水中に生まれ育まれる。青は五行説では春の色、青春、青雲の志ほど広く未来を望む。又、日本の三原色の一つ、青、緑藍にわたり植物繁茂の色、眼の前の青林檎一顆を見つめ、遙かの時空を辿つて、生命の原郷、太古の海の色を思うのである。観念の句ではない。眼前の「青林檎」に触発された感動の一句。古語「遠つ世とう」「かも」との呼応神妙、凜々「青りんご」が初々しい。「かも」の抱懐が魅力の一旬。かな書き青「りんご」の用辞も周到だ。

尺程の片陰に入り煙草吸ふ

宏之助

詠み口一変、一気によみ下した句。今更に自ずから愛煙家の思いがにじみ作者は微苦笑の態。それにも現代はスマーカー受難の時代、何ともいぢらしいではないか。「尺程」が絶妙。いろは歌留多の昔から「三遍廻つて煙火にしよ」、せめて尺土の片陰、どうぞ、ゆるりと一服を。それにしても、泰然、ヤングレディ・スマーカーの吹かしつぶりは・・・。

りもまづは緑立つ木曽路を行こう。都会の片隅の林径散策のはそれはそれ、これぞ本家森林浴の誉れ、一読忽ち、大きな檜風呂にとっぷり浸り、全身香気に包まれた気分になつた。出だし林間しめやかに、中頃、ゆつたり湯舟に息抜き、止め「氣」で婆婆に生き返る。

上空を蝙蝠が飛ぶだろう。時空を超えて変わらぬ町の氣韻が、人々の嘗みがそこにある。ただの叙景句ではない。や」がすばり決まり奥深い情感が漂う。(7.24)

口遊む音律はまさに生体のリズムそのもの。「氣」はスピリットそしてエア、天地渾然の直中に在り。西洋の哲人も言つたではない「自然に還れ」と。才氣煥発の一句。

一句鑑賞（四・五・六月号）

飯田幸三

ぼうたんとして開けども水中花

幸一

季語はもとより「水中花」。花は牡丹、豪華豊麗、気品の花の王。とはいへ花は「水中花」、硝子の器に封じられつきり。物言わぬ花の心は・。水中花に注ぐ作者の視線が見えるようだ。さて「水中花」に何をみ、どんな思いを託すのだろう。「ども」に籠る思いは深く重い、正調の一句である。難物「として」を籠絡、ひそかに沈み、出張らず手練。

蝙蝠や暮るゝに早き漁師町

多美子

昭和一桁生れの目にも、日本国中、家並、景色はすつかり変わつた。都會も農漁村も。でも人々の生業なりは當々と変わりない。特に漁の船出は今も朝早い。そのかわり水揚げの賑いが過ぎると港町は静まり返る、あしたの出漁に備えて町が暮れるのは早い。きまつて

浅草の夜の賑ひや啄木忌

昭七

啄木の死は明治末年だが大正の人の印象が濃い。浅草の賑いといえば、それを象徴するのは凌雲閣の明りや花屋敷の人出だつた。とみに賑いの戻つた浅草を散策しながら、啄木もきっと高楼の灯を見上げ、奥山の人混みを歩いたに違いないと在りし日に思いを馳せるのである。凌雲閣がいつ建てられたかはそれとし、時代を先取りした多感な夭折詩人を偲ぶにふさわしい啄木忌の句。凌雲閣は関東大地震で崩壊した。「夜」は「よる」と読み、「や」をとり、「賑ひ」で切つたらどうだろう。

はまなすの薫る砂山啄木忌

昭七

「はまなす」は海浜の花、浜は砂、「砂」は一々引くまでもなく、人口に膾炙した啄木名歌のゆかり。はまなす（玫瑰）は沖ひろびろと未来を見はるかす。「玫瑰や今も冲には未來あり」（草田男）。はまなす咲く砂山に佇ち、天才歌人の早世を惜しむのである。名歌の歌句や特別の地縁に拠らぬ点で、前句「浅草や」と共に

類想をみない、いい句だと思う。もし気になるとすれば「薰る」の情緒だろうか。

錢湯の煙もくもく啄木忌

煙「もくもく」が手柄。オノマトペは目に物見せて

くれる。これは錢湯のけむりだが文明開化のシンボルSLの噴煙に通い面白い。明治の中頃には確か本州の北端まで鉄道が伸びていた。啄木も何度も蒸気機関車に乗つたことだろう。本郷辺りの錢湯にも通つたに違いない。啄木の生きたその時代を振り返る一句である。

雛罂粟の斯くしをらしき珠蓄

高志

開花の過程を見事にズームアップして見せてくれたみちさんの鑑賞があるので余分だが、「斯く」しをらしきが贍。万感息を呑む。「しをらしき」は控え目で、慎

みがあり、可憐な風情、紅ほころぶ薔薇を眼に珠と愛で慈しむのである。そして、間もない優美、妖麗、官能匂う花の盛りを想像する。あるいはふつと、かの閨秀歌人の相聞の歌を口遊むか。むべ別名麗春花。

兵の日があり罂粟坊主青坊主

幸一

これも健二さん、陽一さんの剝切な鑑賞がすでにあり余分。一読、あれこの場面が脳裏をよぎる。私事だが、長兄が大陸河南の地に果てた。出征する前、母に髪を刈つてもらつていた坊主頭が目に浮かぶ。今や戦中戦後すら知る者は少ない。「あり」はその時代を実

地に生きた者ならではの「実感」、ずしりと重い。今も地上に戦火、戦斗は絶えない。「罂粟坊主青坊主昭和の雲湧いて」（三泥）、物まね戦中少年のこれは空疎にひびくのみ。

放たれて犬嗅ぎ回る首宿

みち

博覧な陽一さんによる名評があり駄弁で恐縮、「廻るならぬ」「回るがまことに如実。犬の挙動が逐一手にとれるのだ。脱兎のごとく行き、ふと立ち止まりぐるぐる嗅ぎ回る。「首宿」が断然の決まり。はたまた私事で恐縮だが、以前毎日散歩に連れ立つた飼犬の元気な姿が忽然と甦る。「もう飼犬が死んで十年首宿」（三泥）

病床の三社祭の遠音かな

昭七

（前句）高志さんの明快な選評がすでにあり、どだい蛇足だが、病床「の」が贍。これが「に」だと遠音を聞くことの報告、「の」はしみじみ身に入める病床の寂しさそのもの。三社祭の句で類例を知らない。（後句）「川」「川」の反復と相まって「振り上げ」が三社祭の熱気と、続々、神輿の轟きを演出して心憎い。臨場感あふれる一句だ。ただ、「隅田川」と「三社祭」が重なるのが惜しい。

（平29・7.3）

*朝日6月3日ひと欄にハエトリグモの図鑑を出す小学校教諭須黒達巳さん（28）が載った。昨年みちさんの蠅取蜘蛛の句をひろし先生が特選にとられた。私の畏友が最近蠅取蜘蛛を見なくなつた、子供らはこの虫を知らないと頻りに言つたのを思い出したのでここに紹介する。カメラで撮つていると、顔付や模様が違う。筑波大二年の時沖縄の離島で初めて新種を見つけ「ミカヅキハエトリ」と命名した。出版社から図鑑を出そくと声を掛けられたが、中途半端は嫌と大学院終了後フリーランスになつて採集旅行に出る生活を丸二年続けた。これまでにクモの新種を五つ発見し、13種に和名をつけた。国内で確認されているハエトリグモ¹⁰⁵種中103種を撮影した図鑑を出版する。今は慶應幼稚舎の理科教諭になつた。子供達からは「スグモ先生」と呼ばれている、というもの。蜘蛛だけの風狂だが、陽一さんの後継のような好青年が出てきました。

*6・27金子兜太さん海程終刊決意後の心境の見出しがかなり長い文が掲載。有季定型客觀写生→造形論（イメージ^{映像}を構築して俳句を作る）の作句の方法論である。取合論（許六）構成論（誓子）とかと同じであるが、自分の言葉で書いてそれが是と自負している。

（梅咲いて庭中に青鮫が来ている）はサンゴ環礁の島の周りに青鮫がたくさんいる。正月に寒紅梅が咲くと思いつ出す。梅が咲く頃の空気は青い。中に入つていく

と海の中に入つていくような感じがある、と書く。

*駒場へ行つた序に前から覗きたかつた日本民藝館へ入つて色絵の器を見た。その際民藝という機関紙⁷⁷⁴号をみちさんが購入した。その中の「作家の創作と工人の制作」—民藝における創造性の秘密—松井健の講演をもとに書き下ろした論考が載つていた。俳句の創作にも通じるのでここに紹介する。一々引用は控えますが、芭蕉の「雪舟の絵における利休が茶における其貴道する物は一なり」が思い起こされ、民藝の創造も同じと思つた。柳宗悦が「私の云う民藝とは一般民衆の使う日常生活の用品であるが、正しい質と懇切な仕事と健康な美しさを具有するものを指摘して云うのである」とか「民藝品だから美しいのではなく民藝品でないものであるから醜いのでもない。美しいものは、何ものにあれ美しいのである」とか、この著者が、柳宗悦が自分の云う美しいものについて、極めてわかりやすく、簡潔に書いたテクストがあると紹介されてある。

美しいものは、正常、無事、当り前の素直なものであるゆえに美しいのであり、「民藝の美を見るとは、そういう『平』の美を見届ける事である」という。特定の

立場の固執などない自由さこそが民藝の美しさを支えるのである。「自分が形をとった時、美しいものが生まれる」と極限される。ではどうすれば作れるのか。二つある。一つは直登する自力道、難行道である。もう一つはすでにある伝統の中に身をおいて、そこから美しいものを追おうとするものである。他力道である。易行道である。後者の方が凡人の道として取るべき道だと思う。その際、伝統の中から作家は自分の学ぶべき美しいものを自力で発見しなくてはならず、しかも、その美しいものを漠然と受容するだけでなく、それを自分の創作に役立てなくてはならない。要するに、作家の創造は、昔から伝わっている美しいものをよく見て、そこからその美しいものの根元を学び取り、それを自分のものとして、よく消化吸収して、自分の作品として、手から作り出すことであるといえよう。文藝である俳句は言葉から作り出すのであるが、民藝も俳句もその貫道するものは同じであると痛感した。

*松村幸一さんから「利根川図志」という題でのエッセイ一枚を貰った。平成26年6月の屋根に載つたもの。布佐の対岸の利根町は旧布川であって、赤松宗旦の墓がある。江戸末期に利根川流域の風土を科学的な目で正確に書き残した地誌である。幸一さんはこの本を手に入れるまでの苦労を書かれておられる。白金葭

記念号に載せられた利根川の句はこの地誌の名残を持つ名句だと今も思つていい。利根川図志は「北越雪譜」の影響もあるらしい。菅江真澄の「遊覧記」、それに近藤富蔵の「八丈実記」とも同じく郷土愛がなければ書かれていない。私は本居宣長も日本を愛するが故あの古事記伝を成し遂げたのだと思う。幸一さんは江戸時代呼塚河岸と呼ばれた桜並木の道を往還してこの本を入手された。利根川図志を愛するが故この文章を書かれたのだと私は思う。

受贈誌（H 29年7月号）

つよき香を発す刈草乾きつつ（彩135号）

平野ひろし

杭を打て綱もと張れテント張る（リ）

リ

キヤンブ張る赤ん坊連れて犬連れて（リ）

リ

涅槃西風石抱く幹にキリル文字（リ）

杉山晃美

末黒野に奔る太陽ギリル文字（リ）

遠藤恵子

一湾を大きな窓に夏座敷（東京ク7月）

文男

梅雨晴の秩父盆地の夕支度（リ）

万世遊

木曾川を瞰る大山城五月雨るる（リ）

理佳江

山裾の如意輪觀音濃紫陽花（リ）

守啓

女坂落花の帶の嵩なして（あすか7月）

山尾かづひろ

山尾かづひろ吟行ノート（H 29・7・7）

牛蛙線路はつづくどこまでも

飯田孝三

口あけあけて親待つ燕の子
賑ははし越して十年雛燕

光成高志 光みち

「修羅」と「ひと」—賢治の「修羅」について武者昭七
詩集「春と修羅」(大正十三年刊行・賢治廿八歳)なか
の一篇(同じ題名の)「春と修羅」のなかに次のような
不思議な一節があります。

草地の黄金をすきでくるもの／ことなくひとのかたちのもの／けら（雨天に農夫が身に着けるもの。蓑）をまとひおれを見るその農夫／ほんたうにおれが見えるのか

時には暴力さえ辞さない恐ろしい存在でした。土神は修羅道に墮ちた存在なのです。賢治における「修羅」とはそういう世界を生きるものだったのです。だから賢治が「おれはひとりの修羅なのだ」というとき、輝きの春の景色のなかにいながら、「ひと」としての賢治の「かなしみは青々ふかまり、風景はなみだにゆすれ」てしまうのです。「このからだそらのみじぢんにちらばれ」とは修羅をぬけだし、玲瓏の春の大気の中に拡散してしまいたいという賢治のせつない願いのことばなのです。

草地を踏み分けてくる農夫にむかって「おまえに本当にこのおれが見えるのか」と強い口調で問い合わせています。相手が目の不自由な人でない限り普通はこんな問い合わせはしません。自分はこの農夫には見えていないのでかもしれないというおそれと疑念がそういわせるのです。なぜなら「おれは一人の修羅だ」からと賢治は思うからです。目の前の農夫は間違いなく「ひと」とである(二)となく「ひとのかたち」のもののに自分は「修羅」だというのです。修羅と「ひと」とは仏説にいう六道を輪廻する存在でありながら住む世界もないかも決定的に違うのです。異次元の世界なのです。「土神と狐」という童話はそれをリアルに描き切っています。土神は誇り高く傲慢でしかも嫉妬ぶかい、

修羅意識が賢治を強くとらえている場面は妹トシの臨終の場面（「無声慟哭」）にもみられます。トシが死に近い自分の顔つきやら体臭やらのひどさを気にして懸命に尋ねるのを賢治もそれを感じながら、あえて「ほんたうにそんなことはない」と否定するいっぽうで「わたくしにはそれをいまいへないのだ」と口をつぐんでしまいます。「わたくしは修羅をあるいはいるのだ」からというものがその理由です。いままさに「人間界」を離れて聖なる「天上界」に転生しようとする妹に向かつて「修羅道」にある自分は見え透いた慰めの言葉などかけることはできないのです。賢治の出来ることは「かなしさうな目をして耐えていること」だけなのです。だから「わたくしのかなしさうな目をしているの

は、わたくしのふたつの心をみつめているためだ」と賢治はいいます。「ふたつのこころ」とは死んでいこうとする最愛の妹に寄せる兄として、「ひと」としてのこころであり、もうひとつはそれを許されない「修羅」を生きるものとの決意でありこころです。賢治はそんな「ふたつのこころ」「ふたつのせかい」を生きたのです。賢治にとって「修羅」とは「比喩」ではなく、たしかな「実存」であったのです。修羅道を生きる賢治のかなしみと形相のすさまじさを賢治は以下のようにうたっています。

四月の気層のひかりの底を／睡しはぎしりゆききする／おれはひとりの修羅なのだ・・・雲はちぎれてそらをとぶ／ああかがやきの四月の底を／はぎしり燃えてゆききする／おれはひとりの修羅なのだ・・・。

(注) 六道 衆生が善惡の業によつておもむくとされる六種の境界で地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上のこと。この六道の間を生れ変わり死に変わって巡り歩くさまを六道輪廻といふ。輪廻の輪を断ち切る作業が修行である。

お便り広場 (到着順、敬称略)

前略一周忌において頂けることと大嬉しく存じます。ところで時間を変更しましたのでお報せまで。
(中略) 追伸：「小熊座」誌に「20句選」というのが

あり、二人の同人が拙句「操り人形 マリオネットの如く老軀を初湯かな」を探つてくれて居ります。俳人互に老齢を慰めあつてゐる状態です。

(6.8 陽二)

梅雨とは云え、カラ梅雨が続いておりましたが、ここへ来てそれらしくなつて來たようござります。白金葭七六号拝受。昨年の六四号と表紙を見比べてみました。同じ植物でも撮つた場所とか天候とか、又、昨年は黄色の紙で今年は白こんなにも見た目の印象は違うものなのに、ビックリです。高志様の翡翠の停止飛行、みち様の翡翠の一閃 カワセミ(生きている)をみられず残念。ご自愛下さい。(白紫蘭の絵葉書) (6.24 璃子) 六月号拝受、誌面いよく充實、作・選・隨筆一体の旗印風になびく如くです。愚生の拙句も皆さんの名鑑賞を戴き面目一新。俳句は読者あつての文芸とつくぐ感じて遂にワープロが壊れ後追いの鑑賞もままならず、御免なさい。お陰さまで松葉杖片方外れました。七月にはぜひ伺いたいと思つています。木下遊船吟行の賑わい手にとれます。句会・編集発行と一切合切おまかせで済みませんどうかご無理なきようお願ひ致します。陽也さん、其の後如何でしようか。急がば廻れ着実に快癒の歩を踏まれますよう日頃念じております。吳々もお体大切にご健吟のほどを
俱にあり昭和一桁青林檎

前略 取り急ぎ要件のみ申し上げます。白金霞六月号と共にハガキと法隆寺参拝案内書届きました。(中略)以上こちらの考えをまとめたものです。

追伸 ミサ子さんには何も話していませんが又折を見て話してみよう?かとも思っています。そちらからもはがきでも出しておいて下さい。

梅雨末期自然災害詮方なし

(7.7 健三)

御健吟のことと存じます。各地で熱暑洪水頻々ですがお国やお身近の方々に被害はありませんか。きのうの診察で松葉杖から解放されました。あとは順次歩行に馴れるだけとなりました。八月三日の最終診察で放免となる筈です。ご心配をおかけしました。今月の例会には出られると思います。ぜひそうしたいと思います。皆様と再会できるのが何より楽しみです。「白金霞」四月～六月号掲載句々、毎月の鑑賞にのぼらなかつた句を主として、後追いの鑑賞を試みました。今更ですが、ご通覧下さい。何分にも乱筆ですので御目を痛められない様願っております。とにかく破天荒な梅雨模様です。ご夫妻ともぐ呉々も御身お大切にご健吟の程祈り上ります。

七月七日

飯田孝三

不明ですが、何とか回復なさるようお祈りするしかありません。何をするにも健康第一ですが老いは一日一日と進み句会で疲れる限界を感じることもありますが、マア今のところは頑張ております。ご近所に虫の飛び交うところがおありのよう気がします。虫なのに夜の闇に美しい光を放ち人を琵琶せるなんて同じ虫でもヒアリなんて困りものは人を騒がせ國中のサワギですね。これから続く暑さお体お大切になさいませ。

光成高志様

(7.11 璃子)

暑中お見舞い申し上げます。「ほつほつと木槿地に落つ苦屋かな」(寥廓) 檀花一朝の夢といふことわざは、(以下略)

(7.22 征司)

毎週一回あつた源氏物語講義が終わって同級生の髭面の主宰との端居語りのような雑談が楽しめなくなつた。なんだか一週間の句詠点が消えてしまつたようでした。ちょっぴり手持ち無沙汰で寂しい気分です。教室と帰りの電車内の会話はいわば二人の芸林閒歩のごとくであり、そこでは常日頃着々と俳諧の古典的追求を重ねる大兄の高論にすいぶん啓発されました。その意味で七月例会のあと、旗亭コビアンにおける会員の歓談は楽しかった。陽一さんの復帰が待たれます。例会前の時間に炎天下、実篤邸探訪という独り吟行をした宏之助さんには脱帽しました。

(7.23 健二メール)

先日は御世話になりました。久し振り楽しい一時でした。陽一さんの一日も早いご回復と再会をお待ちいたします。「一句鑑賞」の拙稿をお送り致します。御目を痛め恐縮ですが、何卒よろしくお願ひ申し上げます。猛暑の折ご自愛ご健吟を。

(7.24 孝三)

暑中お見舞い申し上げます。お早々とお見舞いあ
りがとうございました。お障りなくおすごしのご様子

何より嬉しく存じ上げます。大観の杏まさにさわや

か気分を味いました。デンデン虫まで描かれています
ね。我が家家の杏は野鳥の絶好のタベモノで、今年やつ
と十個手にし、ジャム小壇二個出来ました。生ですと

甘いのにジャムに煮るとすっぱくお砂糖をアメになる
寸前まで入れました。どこへも行かずやつと義務感から小石川の寺へお施餓鬼に行き乗物と長時間の法話法要で疲れ果てました。若い中に行きたい処へは多少のムリをしても行くべきと思います。光成様もお元気にしていらっしゃいますか。小山さんのその後は?
大夕立けむりし方によもづくに

我孫子日記

6/17	木下吟行
6/20	* 悅子さん一年忌
6/21	SOA
6/24	*2 二階堂和美
6/28	SOA
7/2	猪鼻公園
7/6	*3 駒場
7/19	柏アミュゼ
7/21	例会

(7.25 璃子)

*空梅雨やほんに妹御と思ふ
*2 「一本の鉛筆」の声よく通る
*3 片口の藁の模様の涼しけれ
夏館リーチの赤絵我孫子の字
野草園射干の朱の目立ちをり

梅雨灯し螺鈿重箱輝けり
大皿を池に見立てて蓮の花

編集後記

鑑賞文が多く寄せられたので、軽み(36)は割愛しました。八月は句会を休みますが、その他は掲載します。昨年と同様です。昔と暑さが違います。元気に来々月にお会い出来ますように。

高志
みち リ リ リ リ

白金霞7月号(通巻第七七号) 平成二九年7月26日発行
編集・発行人 光成高志
発行所 二七〇-一一九 我孫子市南新木一-四一七
☎ fax ○四一七二八七一〇六八
表紙の題字・加納綾女 同写真は7月26日の白金霞